

やさぐれエリオとコミュ障キャラwithスカピョン一家

郷汐@乱雨スペラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはエリオとキャロがフェイトさんと出会わなかったIFの物語。

おや……二人の様子が？

キャラ&原作崩壊、設定うる覚えと地雷要素満載です。

それでも読んでくださるといふ神様女神様以外はブラウザバック推奨。

目次

第1話	まだギリギリやさぐれてないエリオくん	1
第2話	コミュ障（軽度の人間不信）キャラとの旅路	6
第3話	エリオくんと面倒事の予感	11
第4話	エリキャラの騒がしい出立	14
第5話	エリオと変態（スカピヨン）の出会い	20

第1話 まだギリギリやさぐれてないエリオくん

すでに日は落ち夜の帳が降りあたりはほの暗い。
そこはとある管理外世界。

夜空に瞬く星たちの光が優しく照らす森で小さな炎が輝いている。
遠くに川のせせらぎが響く開けた場所に焚火がある。

火のそばには木の枝に刺された魚がありそれに見入るように座る
小さな赤毛の少年がいた。

薄汚れた服を身にまとい、腹を割り開かれた魚たちが赤い炎に焼か
れる様を身じろぎもせずじっと見つめている。

そんな少年の肩がびくりとはねる。

そして暫くするとがさがさと葉のこすれる音をさせながら少女が
姿を現した。

髪は桃色でぼろぼろのマントを身に着けその小さな腕に果物を抱
え、ふらつきながら少年に近づく。

その後ろから一匹の小さな竜が追いかけるようにして森から飛び
出す。

「見て、エリオ君。こんなに採れたよ！」

「お帰り、キャロ。もうすぐ焼けるから夕飯にしよう。フリードもお
帰り。」

「キュクルー」

満面の笑みを浮かべる少女に微笑みを返し、竜の頭を撫でた少年は
再び焼いている魚に目を向ける。

異常な光景である。

幾ら次元世界の就労年齢が低いと言っても10にもならない子供
達だけで野宿紛いのことをしているのはおかしい。

そう、彼らはその出自からして普通ではない。

出自のせいで親元から離れて二人と一匹で暮らしているのだ。

正確には引き離されて、となるが。

*

僕の名前はエリオ。

ファミリーネームはない。

エリオという名前も本当は僕に与えられたものではない。

僕のオリジナルにつけられた名前だ。

そう、僕はクローンなのだ。

それも違法な技術を持って造られた。

僕はそうとは知らず両親と幸せに暮らしていた。

しかし、幸せな暮らしを長く続けることは出来なかった。

僕を生み出した技術、プロジェクトFは成功例が少ないらしい。

クローニング自体は上手くいっても記憶転写や魔力資質に問題が出る 경우가多く、数少ない成功例である僕達を狙って違法な研究所の研究者達が僕の家を訪れたのだ。

そして両親は僕を捨てた。

研究者達は僕が違法なクローンで有ることを盾に取り管理局への通報をしない代わりに僕を手放せと脅しをかけ両親はそれに屈した。

親子の絆とはこの程度なのか？

それとも僕が偽物だからか？

どちらにせよ、もう他人なんて信じられない。

両親に捨てられ呆然とした僕を管理外世界に連れ出した研究者達は地下に造られた研究施設、その最下層の牢屋のような場所にぼくを放り込んだ。

頭の中で自問自答を繰り返していた僕を現実を引き戻したのは向かいの牢屋にとじこめられた少年だった。

拘束され、傷だらけになって呻き涙を流していた。

その光景は停滞した僕の精神に恐怖と言う衝撃を与え、恐怖は生への執着を生んだ。

次の日に研究者達が牢屋を訪れ、少年を拘束したまま連れて行った。

少年は帰って来なかった。

それを恐怖に震ながら見ていた。

連れて行かれた少年が縋るように僕を見ていた。

いや、あれは次は僕の番だという意味だったのかもしれない。

少年が連れて行かれた翌日僕の番が来た。

白衣を着た男が僕を牢屋から連れ出した。

その時連れて行かれた少年の姿が頭に思い浮かんだ。

目が、あの少年の目が僕を見つめている。

僕を見つめる目が憎悪を孕んでいる。

精神の限界だった。

僕を連れて行こうとする研究者に電撃を浴びせた後一目散に走り出した。

とにかく上へ、上へ。

無我夢中で走り続けた。

途中、捕まえようとする奴らもいたがそいつらにも電撃を浴びせる。

僕が幼子だからか、自失状態だったからかは知らないが特に拘束されていなかったのは幸運という他ない。

その研究所には研究者しかおらず脱出は容易だった。

しかし、研究所から逃げ出してからも安息の日々が訪れることはなかった。

広大な管理外世界は鬱蒼とした木々が蔓延っていて、研究所も森のど真ん中。

目の前に広がる森に飛び込んだ僕はあてもなく彷徨うことになり野生の厳しさを知ることになる。

襲いかかってくる魔獣達に電撃を浴びせ、川で優雅に泳いでいる魚達に電撃を浴びせ、気絶した魚達にさらに電撃を浴びせ食べた。

最初は魚への電撃加減がわからず爆散させたり、黒焦げにしたりと散々だったが獲った魚は残さず食べた。

命は無駄にできない。

夜は電撃で起こした火を焚いて眠る。

そんな生活に慣れてきた頃、電撃の魔力反応を辿ってきた研究者と護衛であろう魔導師達に遭遇。

電撃を浴びせて撃退する。

電撃浴びせすぎである。

電撃万能説を提唱したい。

魔獣対策の罫を設置していたのも幸いだった。

数日後に倉庫のようなものを発見。

入り口は電子ロックされていたので電撃を浴びせて壊すも幼い僕
の力では電子系統が壊れて鉄の塊になった扉を動かせなかった。

提唱したばかりの電撃万能説を自らで覆すことに。

さらに数日後この世界を中継している密輸屋がやってきた。

どうやら僕が扉を壊したのはこいつらの食糧倉庫兼商品倉庫だったようだ。

目の前に食糧があったことを知ったときは眩暈がした。

とりあえず研究所の連中と一緒に来た魔導師からぶんどったデバ
イスと僕自身の戦闘力をネタに密輸屋とOHANASHIする。

しかし、僕の唯一の魔法電撃のアピールをしていると扉を壊したの
が僕だとバレてしまった。

電撃エ……。

襲いかかってきた密輸屋達に電撃を浴びせる。

近くに密輸屋達の使っていた転移魔法陣があったので使ってみる
とどうやら船に転移したようなので失敬することにした。

操縦席を見つけるも当然動かせるはずもないので電撃を浴びせた。
オートパイロットが作動したのは運がよかった。

最初は快適な船旅を楽しんでいたが食糧と水が積まれていなかっ
たことに気づき絶望。

トイレの水を飲むかどうか真剣に悩んでいる間に飢えと水不足で
昏倒。

次に目を覚ました時には魔導師らしき連中に囲まれていた。

何も知らない子供を装っていると船の外に連れ出された。

外には豊かな自然が広がっていた。

飢えと水不足で理性に限界が迫っていた僕は魔導師達を振り払って森へ呐喊した。

「ワレワレハカンリキョクノ」とかなんとか言っていたがよく覚えていない。

水と魚でお腹をいっぱいにするも急な食事を飢えで弱った内蔵が受け付けなかったのか全て戻してしまった。

一人と一匹に出会ったのはそんな時だった。

「うん、フリードリヒっていうんだ、フリードって呼んであげて。ずっと私に着いてきてくれてるの」

「へえ、ドラゴンなんて初めてみたよ。よろしくね、フリード」
「キョクルー！」

フリードも警戒してないみたいだし、同い年くらいの男の子と話すのなんて初めてだけど不思議と恐怖は感じなかった。

今まで会ってきたのは変なおじさんばかりだったから。

それに弱ってるところに出くわしたのも大きかったと思う。

「キャロはどうしてこんなところにいるの？ 僕はちよつと色々やらかしちゃって逃げてきたんだけど……」。 あ、僕のこと他の人に聞かれても黙つというね」

「それは大丈夫だよ、私もちよつと町で暴れちゃつて……。こここまで逃げてきたんだ」

「キャロみたいな子が？」

「あはは、意外だった？」

「うん、そんなことするようには見えなかったから。何があつたの？」
正直思いつくのもイヤだったけど、エリオくんもひどい目にあつたみたいだったし話し出したら止まらなかつた。

「最初は人のいる場所にいたんだけど、何でか変なおじさんに話しかけられるようになったちゃつて……」

そう、そうなのだ。

脂ぎったおじさんの手が私に幾度となく迫ってきた。

その度にフリードがおじさん達をローストしてくれた。

でも、そんなことが何回も起こるものだからフリードは何もしてないおじさんにも火を吹きかけるようになってしまい人里から離れることに。

「だから、人が多いところには行かないようにしてたの」

「そうだったんだ、僕とは違った意味で大変だったんだね」

話を聞くと、エリオくんもひどい目にあっていたそう。

「ねえキャロ。もしきみがいいって言ってくれたらだけど、僕と一緒に行かない？ ああ、もちろんフリードも」

「私といったら変な人が来るかもしれないよ？　それでもいいの？」
「キユクルー♪」

「あはは、フリードは乗り気みたいだよ。それに、僕から言い出したことじゃないか。あとはキャロがうなずくかどうかさ。僕もおたずね者だしね」

「うん、それなら私からもお願いするね。　よろしくエリオくん！」

「よろしくキャロー！」

「キユクルー！」

こうして私達は一緒に旅をすることになったのだ。

*

エリオくんと一緒に旅すること2年。

私達はまた管理外世界にいた。

でも、今回は逃げてきたのではなく新しく始めたお商売のためだ。

「今回は楽だったね、何より遺跡の近くに川が流れているのがいい」

「エリオくんはやっぱりお魚好きだよね」

「今じゃお腹も壊さないし、何より簡単に捕れるからね」

「キユクルー」

「ほら、フリードも好きだって言ってるよ」

「エリオくんが捕って、フリードが火をつけて、私が料理するのが黄金パターンだもんね」

お仕事が一段落して、今は遺跡の近くに作ったベースキャンプでお昼ご飯を作ってる。

メニューは、トマト缶を使った魚と豆のトマト煮込み。

「いつもキャロに面倒ごと押し付けちゃってるみたいだから、たまには僕がやるよ？」

「ううん、いいの。重い荷物はエリオくんが持つてくれるでしょ？」

料理するのは私に任せてー！」

「それじゃあよろしくお願いしますけど………。このやりとりももう何回やったかわかんないね」

「もう一緒に旅して2年も経つからね」

こんな感じでのんびりしているけど、私達がやっているのは危ないし、悪いことだ。

私達がお仕事にしているのはロストロギアの盗掘。

「本命はたいしたことなかったけど、一緒に宝石がみつかったからいいお金になるよ」

「そうだね。それに、今の取引先は変な人が多いけど私達には何もしてこないし、しばらくはのんびりしてるのもいいかも」

「まあ、話し合いは全部僕だけだね」

「あはは、やっぱり人とお話するのがちよつと怖くなっちゃって……」

この2年の旅の間に、私は人と話すことが怖くなってしまった。

最初は、人のいる世界で優しそうな服や小物を譲ってもらったりしていた。

でも、そのうち危ない人が声をかけてきたり、管理局の人達に追いかけられるようになった。

フリードの通り魔的ローストや、エリオクんの過剰防衛電撃、私の混乱アツパーが悪かったみたい。

アツパーは男の人なのに、女の人みたいな話方をする人に教えてもらった。

私達は、守備範囲外というものらしく、しばらくその人のおうちに泊めてもらって雑用をする代わりにごはんをもらう生活で羽休め。

ところが危ないお薬を持っていたことや、管理局の人にひどいことをしたことが捕まってしまった。

お尻がどうか言っていたけど、よくわからない。

私達は、おうちを調べに来た管理局の人にそのことを聞いた。罪状が追加されたとも。

親切で人を泊めることは悪いことらしい。

管理局に連れて行かれそうになったので、フリードが火を吹き、エリオくんが電撃を浴びせた。

その後は、悪い人の用心棒になったり、変なお金持ちに売られそう

になったりと色々あり私の対人恐怖症が加速。

人目を避けて、管理外世界の遺跡に寝泊りしていた時に、スクライア一族という盗掘専門の人達と遭遇。

スクライアの人達は、私達に優しくして居心地がよかったけど、遺跡で見つかったロストログアを引き取りに来た管理局の人に見つかりそのままお別れ。

今では、私達もスクライアの人達に教わったスキルで盗掘するようになったのである。

「まあ、裏切られない間はお世話になろう。品物の仲介もしてくれるから助かるし」

「うん。やっぱり寝るならベッドがいいもんね！ よし、後はパセリをかけたら完成だよ」

料理も完成、器によそって皆でいただく。

「いただきます、キャロ」

「いただきます。いっぱい食べてね、エリオくん、フリード」

「キョクルー♪」

パクつと一口。

大丈夫、上手に出来てる。

エリオくんとフリードもご機嫌だ。

ふかふかベッドと他の人の手作り料理も捨てがたいけど、お外で食べるごはんも美味しい。

「帰ったら換金が終わるまでゆっくりしよう」

「お買い物に行こうよ、エリオくん。美味しいアイスのお店があるらしいから」

「アイスかあ、楽しみにしてるよキャロ」

こうして平和な時間を過ごしていた私達だけど、次のお仕事でどんなでもないことになってしまうなんて、欠片も思っていなかった。

第3話 エリオくと面倒事の予感

遺跡から帰ってきた翌日の昼時。

遺跡で発掘したロストロギアを、現在お世話になっている組織に持ち帰った僕達は思う存分くつろぐことに決めた。

とりあえずは与えられた部屋でゴロゴロすることにして、ベッドに身を委ねた。

ちなみにベッドはキングサイズだ。

僕とキャロが二人で寝転がっても十分すぎるスペースがある。

フリードは枕元に置かれた専用のクッションの上で丸まっている。

「それじゃあお休み、キャロ」

「お休み、エリオくん。夕食は部屋に運んでもらうから」

「ありがとう、やっぱり食堂に行く気にはなれなくて……………」

「気にしないで、私もあの空気はちよつと……………」

僕達は苦笑いしながら目を閉じた。

この組織には男しかない。

皆が皆、筋肉質な男が好みという変態集団だ。

最初はただのトレーニングジムだったらしいが、ドーピングしてみたり、違法薬物に手を出したり、ロストロギアで極限まで身体強化してみたり、腕試しと称して好みの男に通り魔のように襲い掛かったり、それで殴り倒した相手をお持ち帰りしたり……………。

どうしてこうなったのだろう。

夕食時になれば、食堂がプロテインや薬をキメながらポージングをする筋肉達磨達で溢れかえる。

その濃厚な汗の匂いは嗅覚への暴力だし、ポージングで強調された筋肉は視界への暴力だ。

僕とキャロとフリードは、雇われたその日に食堂で食事をとるのを止めた。

そんなことを考えていると僕の意識は黒く染まっていった。

*

そんなことを考えていたからだろう。

僕は悪夢を見た。

「うぐぐ、筋肉達磨の裸踊りが……」

「筋肉達磨だなんて失礼ねえん。あんまりお口が過ぎるようだとまたメニューがプロテインフルコースになるわよ」

「ツビ。ああ、リズさんですか……寝起きにあんまり怖いこと言わないでくださいよ」

「せっかくルームサービスに来てあげたのに失礼なこと言うからよ」

目を醒ました僕の視界に飛び込んできたのはスキンヘッドの巨漢だった。

極限まで鍛えられた筋肉がその身に纏うメイド服を弾けそうな程に押し上げていた。

「いや、すいません。何か変な夢を見ちゃって」

「横に可愛らしいレデイがいるんだから、彼女のことだけ見てなさい」

「まあ、キャロからは目が離せないですね」

「そういうことじゃないんだけどねえん……」

そうぼやきながら料理の乗った皿を並べていくリズさん。

彼女？ の言いたいことは何となくわかるが僕とキャロはそういう

関係ではないし、そもそも年齢的に早い気がする。

それはさておき、今日の夕飯はビーフシチューのようだ。

湯気とともに辺りへ漂う香りが食欲をそそる。

更に僕のためであろう山盛りのバゲットも用意されている。

彼女？ は食堂を任されるだけあつて料理上手だ。

これで変な性癖さえなければいいのだが……

「何か今変なことを考えなかつたかしらん？」

「イエ、ナニモ」

女？ の勘というやつだろうか、恐ろしい。

思い返すとキャロも隠し事をしていても、それを見抜いてくる時がある。

そういう察しのよさを他の人にも発揮できれば人付き合いも円滑

にこなせると思う。

しかし、彼女が内面を察することが出来るのは僕だけだし、人と接するのを恐れているからまあ無理な話だろう。

この組織全体にはびこる性癖の対象から外れているから、組織の間となら普通に話せるようになったが慣れるまではひどいものだった。

まともに目を合わせることができずに僕の後ろに張り付いて、眠りも浅かった。

今ではリスさんがこうして部屋を訪れるのをわかつていたにも関わらず熟睡している。

「じゃ、私は戻るわん。お姫様を起こしてあげなさい」

「ええ、ありがとうございます」

僕が考え事をしている間にリスさんは料理を並べ終わったようだ。

「それと、食べ終わったらボスのところに行ってちようだい。何か話があるそうよん」

「………わかりました」

帰ってきたばかりなのにな………。

面倒事の予感を胸にしまいながら僕は未だ熟睡しているキャロとフリードを揺り起こすのだった。

第4話 エリキヤロの騒がしい出立

食事を終えた僕達はボスの部屋へと向かっている。

ビーフシチューはとても美味しくてバゲットもフールドと一緒に全て平らげてしまった。

僕と同じくらい食べるフールドはともかくキヤロは小食すぎるのではないだろうか。

食事に10倍近く差がある。

それなのに魔力量はキヤロの方が多いというのだから驚きが隠せない。

いったいどこから魔力が湧いてくるのか。

僕は何回か電撃を放つだけで魔力がすっからかんになるのに。

そんなことを考えている間にボスの部屋の前についた。

重厚な木の扉の向こうからは何かが軋むような音と「ふん！ ふん！」というボスの声が漏れ聞こえてくる。

憂鬱な気持ち溜息とともに身体から溢れ出てくるのを感じながら扉を開ける。

部屋の中には細身の男がいた。

ベンチプレスをしていたらしいその男は、細身の見た目には不釣り合いなほど大きな重りをつけたバーベルを下ろしてエリオとキヤロに向き直った。

男の全身は汗に濡れてテカテカしていて非常に目に悪い。

汗臭くて鼻にも悪い。

「やあ、帰ってきたばかりで悪いけど仕事を頼まれて欲しいんだ」

そんなことをのたまった男は今いる組織のボスである。

名前はカルロス。

圧縮というレアスキルを持つこの男は、自身の筋肉を圧縮し見た目からは想像できないような贅力を備えている。

「また何か欲しいものが見つかったんですか？」

自身の強さのためなら手段を選ばないカルロスはロストログアにも手を出していた。

「例の無人世界でそれらしい遺跡が見つかってね、他に情報が回る前に手に入れてきて欲しいんだ。条件はいつも通り、僕たちが使わないモノだったら君達が好きに使ってくれていい」

この組織の人間は自分達の強化に繋がらない代物には興味を示さないので、探しに行つたロストログアがハズレだった場合僕達に譲ってくれるのだ。

ただし換金は自分達でしなくてはならないのがネックだ。

僕もキャロも交渉事にはむいていない。

僕は自分でも自覚があるほどの短気で、幼子だからとナメられるとすぐに電撃が出る。

キャロは換金所にいたロリコンに絡まれて、フリードが火を吹く。

このような失敗談には事欠かない。

失敗をした時は腹いせに関わつた人間の有り金を全てぶん盗ることにしている。

そんなことを繰り返しているうちに、金の恨みを買つた連中と僕達を追いかけてきた管理局員達がかちあつて三つ巴になることが多くなつた。

僕達は人数が少ないのをいいことに姿を眩ませるのが常套手段だ。

おかげで表でも裏でも生き難くなつた。

今では金に興味がない脳筋共のところくらいにしか居場所がない。

この組織は珍しく居心地のいい場所なので、組織からの仕事は断らないようにしている。

所属している面子は、筋肉大好きな脳筋達だが非常に人情味に溢れている。

好みの男を見境なく襲うのが玉に瑕だが。

僕もキャロも性癖から外れているから平和に過ごしているので問題ない。

これは僕たち二人の共通見解だ。

「はい、わかりました。それじゃ明日の朝一番にここを出ます」

「よかつたよかつた。私は筋トレに戻るからよろしく頼むよ」

「ええ、それでは失礼します。行こうキャロ、準備をすませたら早めに

「寝よう」

「お休みなさいカルロスさん。うん、食料はいつも通り現地調達かな」
そうして僕達は汗臭い部屋に別れを告げた。
まあ、このアジトの部屋は大抵汗臭いけれども。

*

バックパックに明日の荷物を詰め終わった私達はすぐにベッドに身を沈めた。

でも、お昼寝をしたせいかな全然眠くならない。

「ねえエリオくん、まだ起きてる？」

「うん、起きてるよキャロ。キャロも眠れないの？」

もしかしたらと思ってエリオくんに話しかけると、隣のエリオくんが身じろいだのを感じた。

エリオくんも眠れなかったみたいだ。

「いっぱいお昼寝したからかな、あんまり眠くないの」

「僕もだよ、フリードはそうでもないみたいだけど」

エリオくんの言葉通り、枕元からはフリードの静かな寝息が聞こえてくる。

「ふふ、寝る子は育つっていうしまだまだ大きくなるつもりなのかな」

「そうかもね。僕達も初めて会った時と比べたら大きくなったよ」

「……………もう2年も経つんだね」

「色々あったよね、出会い頭から格好悪いところ見せちゃったけど」

「そんなことないよ、私だって食べ物にあたることもあるし。それにエリオくんは格好いいよ」

「キャロにそういつてもらえると嬉しいかな」

そうして思い出話をしている間に私達は眠ってしまい、いつの間にか朝になっていた。

先に寝てしまったエリオくんの手を握りながら寝たのは内緒です。

*

まだ日が昇る前、2人と1匹は組織のアジトを出発しようとしていた。

「さて船の準備も出来たし行こうか、キャロ、フリード」

「うん、もうすぐ日も昇るしお昼には向こうにつきたいね」

「キユクルー」

最低限の非常食と大量の水を詰めたバックパックを背負った彼らは次元航行船のハッチを開いた。

「お早い出発ねえんおチビさん達、お見送りに来たわよ」

そこに現れたのはメイド服を着た巨漢だ。

「リズさん！ わざわざ来てくれたんですね」

「おはようございます、リズさん。あれ、もしかしてそのリボン新しいのですか?」

「流石は女の子ねえん、目の付け所が違うわ！ そんなキャロにご褒美よー」

「あ、ありがとうございますリズさん！ トランクに入ってますけど、これは何ですか?」

リズは笑いながらキャロに大きなトランクを差し出した。

「中身はスパイスよん！ この前オトモダチになった子達がたっぷり持ってたからもらってきたの。まだまだあるから遠慮なく使っちゃいなさい」

「……………不幸な人達もいたもんですね」

「何か言ったかしらん、エリオ」

小声でつぶやいたエリオだが、リズには聞こえていたようで頭を鷲掴みにされて持ち上げられている。

まだ7才のエリオはともかく、水を詰めたバックパックごと持ち上げたりズの臂力の強さが窺える。

「あだだだだだ、すいませんリズさん、アダマガワレルウ」

「全く、思っても相手を不快にさせるなら言葉に出さないのはイイオトコの必須条件よん」

そういいながらリズはエリオを開いているハッチに放り投げた。

「エ、エリオくん!?!」

「大丈夫よ、あれくらいでどうにかなるほどあなたの騎士^{ナイト}はヤワじゃないでしょう?」

「で、でも……」

「心配ならこのスパイスで美味しい料理を作ってあげなさい、それじゃあ気をつけて行ってくるのよん!」

自らが投げ飛ばしたエリオを気にも留めずにリズはキヤロに激励を送る。

フリードを連れたキヤロが心配そうな表情で投げられたエリオの傍に駆け寄る。

「大丈夫、エリオくん!?!」

「キュクルー!」

「な、何とかね……まあ加減してくれたみたいだから大丈夫だよ」

バックパックが上手くクッションになったらしくヨロヨロと立ち上がるエリオ。

「まあ締まらない出発になったけど行こうか」

「うん!」

「キュクルー!」

飛び立っていく次元航行船をリズが見つめていた。

「怪我には気をつけるのよ……」

リズの心配虚しく、目的地である遺跡で謎の爆発に呑み込まれた人と1匹は無人世界から姿を消した。

第5話 エリオと変態（スカピヨン）の出会い

結論から言おう。

僕とキヤロ、フリードはロストログアの爆発に巻き込まれた。

僕達が盗掘に成功し、獲物を持って帰ろうとしていると突然謎の空飛ぶ金属カプセルに襲われたのだ。

無論僕達は迎撃したが、多勢に無勢。

それに魔法が通じないというオマケつき。

僕の電撃とフリードの火球は何とかダメージを与えていたので辛うじて逃げることでだけはできたが、最後には囲まれてしまった。

追い詰められた状況を脱するべく、フリードの竜魂召喚からの強行突破を目論んだ。

しかし、その直前でカプセルの放つレーザーが僕の持つロストログアに直撃。

急激にエネルギーを膨張させ始めた。

まずいと思った時にはもう遅く、キヤロとフリードを庇いながら指向性の電撃を放つことしかできなかった。

そして僕の視界は真っ白に染まった。

ここまでが遺跡での記憶。

そして今僕は見知らぬ天井を見上げて寝転がっていた。
全裸で。

ナンダコレ………。

「やあ、目が醒めたみたいだね」

にやけた男の面が視界の端からニユルつと現れた。

「すごく気持ち悪いー！」

僕は無意識の内に電撃を放った。

「ククク、残念だったね！ 記録映像で君の魔法変換資質のことは知っているのさ、無論対策済みだとも！」

しかし、変態には効かなかった。

「しかし、しかしだ。想定よりも数値が上だ！ やはり今の君は新種の生命体と言えるだろう！」

「何を言ってるかわからない」

「わかりやすく言っただけよう。エリオ||モンディアル、君は死んでしまったのさ！」

息を荒くしながら興奮する変態が僕にそうのたまった。

「ロストログア、レリッククの爆発に巻き込まれ君の肉体は消し飛んでしまった。だが、君はレリッククを核にして再生された！ 興味深い、実に興味深い！ 今の君は実体を持っているがその本質はエネルギー生命体だ！ 何故エリオ||モンディアルの形をとっている!？」

「どうやって生きている!？ どうやって思考している!？ 寝ている君の身体を解剖しようとしたが、メスの刃が通り抜けてしまう！ A MF内では君の肉体は消えてしまったが、A MFを解除すればまた君の身体が形作られた！ どういうプロセスで君は生まれた!？ あの爆発の中で何があった!？ 知りたい！ 知りたい！ 知りたい！ 知りたい！ 知りたい！ 起きて思考している君はどんな数値を叩き出すんだ！」

「どうやら僕は人間を止めてしまったらしい。」

変態が垂れ流す雑音を遠くに聞きながら僕の思考が停滞していった。